

「クリスマス・キャロル」

2009（平成21）年11月29日鑑賞く
梅田ピカデリー→

製作・監督・脚本：ロバート・ゼメキス } ジム・キャ
 エベニーザ・スクルージ（金がすべての嫌われ者） }
 過去・現在・未来のクリスマスの亡霊（他全7役） }
 マーレイ（スクルージのビジネス・パートナー） } ゲイリー・オールド
 ボブ・クラチット（“スクルージ&マーレイ商会”の事務員マン
 ティム少年（クラチットの未っ子）
 フレッド（スクルージの甥） } ロベン・マイアス
 ベル（スクルージの元恋人） } ペン
 ファン（スクルージの妹） }
 フェジウィッグ（27歳のスクルージの奉公先の店主） } ボブ・ホスキンス
 ジョー老人

2009年・アメリカ映画・97分

配給/ウォルト ディズニー スタジオ モーション ピクチャーズ ジャパン

<「パフォーマンス・キャプチャー」をディケンズは予見?>

本作でロバート・ゼメキス監督が採用した「パフォーマンス・キャプチャー」とは、「俳優の表情や動きを連続してデジタルに取り込み、それをスクリーンに再現する」という最新技術。その様相は「アニメ映画でも実写映画でもない、今まで誰も見たことのない映像世界」とのことだ。本作の主人公エベニーザ・スクルージの姿はジム・キャリーという俳優の外形を元に徹底的に検討と修正が加えられ、その結果本作のような痩身に猫背そして高いワシ鼻と長い顎を特徴とした、徹底的に意地の悪そうなキャラクターが完成したわけだ。

他方、チャールズ・ディケンズの小説『クリスマス・キャロル』は、『オリヴァー・ツイスト』の次回作として1843年に出版されたもの。私はこれを中学生の時に読んだが、過去・現在・未来の亡霊（精霊）が登場してくる物語はファンタジー色の強いもの。したがって、小説を読んでいるだけではその亡霊たちの姿を想像するのは難しいから、もともと本作はアニメ向き？そんな風に考えると、ひょっとして19世紀のイギリスを代表する作家ディケンズはその後の映画という芸術の誕生やパフォーマンス・キャプチャーという手法を予見？もちろんそんなことはありえないが、これまで50回以上も映像化されているという『クリスマス・キャロル』が、パフォーマンス・キャプチャーという新手法ではじめて映画化された本作に注目！

<子供連れの親たちに拍手！>

近時子供の肥満や成人病予備軍の問題が顕著になっているが、その大半の責任は子供ではなく親にある。つまり、子供の食事についての親の無関心やファーストフードへの安易な依存だ。それと同じように、子供の情操教育についても親の責任が大いにある。そんな中わずかが数組だが、子連れで本作の鑑賞に来ていたのを見つけ、私は無性にうれしくなってきた。子供向けの映画がたくさんある中、その親たちはあえて本作を選んだことに拍手！

きっとこの親たちは若い頃にディケンズの『クリスマス・キャロル』を読んだことがあり、その物語が教えてくれる教訓が子供たちの情操教育に不可欠だと判断したのだろう。帰りのエレベーターの中で子供たちは「ちょっと恐かったけど・・・」と親たちに話していたが、さて帰り道あの親子連れには本作を通じて親と子供たちの間でどんな会話がはずんだのだろうか？

<『クリスマス・キャロル』と『杜子春』>

日本の数々の昔話やグリム童話、あるいはディズニーの『白雪姫』（37年）など、小さいときの子供たちに語ったり、見せたりしてあげるべき物語はたくさんある。それらの蓄積が成長した時の彼らの感受性に結びつくわけだ。

昨日11月29日に始まったNHK大河ドラマスペシャル『坂の上の雲』では、10歳年上の兄秋山好古が、東京にやってきた弟の真之に対して、「生活は質素で、単純明快がいい」という人生訓を語り、一つの茶碗だけで食事をしたり、「下駄の鼻緒が切れたら、裸足で走っていけ」と命じていたのが印象的だった。私が思うに、私たち日本人にとって、人生訓を教えてくれるもっとも有名な小説は、芥川龍之介の『杜子春』。それは、杜子春という若者が仙人からホントの人間らしい生き方とは何かを教わる物語だ。それに対して、キリスト教国であるイギリスで人生訓を教えてくれるもっとも有名な小説がディケンズの『クリスマス・キャロル』。つまり、強欲で冷酷なスクルージが過去・現在・未来の亡霊たちと出会い、さまざまな経験をするによって自分を反省し、以降の自分の人生を変えていく物語だ。

<最近のクリスマスソングは?>

去る11月10日に報道された民主党の小沢一郎幹事長による「キリスト教やイスラム教は排他的・独善的で、仏教は度量の大きい宗教」との発言にはビックリ。これは、和歌山県高野町の金剛峯寺で松長有慶・高野山真言宗管長（全日本仏教会会長）と会談した時の仏教界からの票集めのための発言らしいが、これに対してキリスト教諸団体が猛反発したのは当然。他方、1980年代のバブル絶頂期の日本ではクリスマスの時期になればホテルはスイートルームから予約で満パイとなり、大阪の北新地は人であふれ返っていた。そもそも、クリスマス・キャロルとは「踊りのための民謡から転じて、宗教的な祭りなどで歌われる祝歌、讃歌を指す」が、キリスト教信仰とは縁の薄い日本でも戦後の高度経済成長期からはクリスマスを祝う習慣が定着するとともにさまざまなクリスマスソングがヒットした。例えば、ユーミンの『恋人がサンタクロース』や山下達郎の『クリスマス・イブ』、そして私の大好きな辛島美登里の『サイレント・イヴ』などがその代表。そして、「クリスマス・キャロル」をタイトルにした名曲が稲垣潤一の大ヒット曲『クリスマスキャロルの頃には』だ。

しかし、日本経済の失墜と景気悪化の中、最近のクリスマスソングは？バブル崩壊後の日本、そしてサブプライム問題発生後の日本ではクリスマスの時期だって北新地の人出はまばら？そんな経済状況を反映しているのか、最近ではクリスマスソングの名曲はほとんど出ていない。そんな淋しい日本の時代状況を感じながら、ディケンズの『クリスマス・キャロル』を鑑賞することになるうとは・・・。

<人間って、ホントにここまで変わるの?>

人間は本来変わることのできる動物だが、本作を観れば人間ってホントにここまで変わるの？という驚きとともに疑問も湧いてくる。小沢一郎が2006年4月7日民主党代表選挙に立候補した時の政見演説で、青春時代に観たイタリア映画の名作『山猫』（63年）のクライマックスのセリフ「変わらずに生き残るためには、自ら変わらなければならない」を引用したことは有名だが、政権交代後幹事長として党務を一手に握り、独裁体制を強めている彼はホントに変わったの？

そんなことを考えれば、そしてまた自分自身の変革を心がけてもホンの少しずつしかそれができないことを考えれば、本作におけるスクルージの180度の変身はすごい。人間って、ホントにここまで変わるの？まあ、それはわからないが、19世紀の作家ディケンズがスクルージのような強欲で冷酷な人間でも価値基準さえ変われば周りの人に幸福をもたらす人間に変われることを示してくれたのだから、「キリスト教は排他的で独善的な宗教」などと言わず、私たちも本作に学んで自己変革しなければ。

2009（平成21）年12月1日記